

# 麦 作

## 「北海道 麦作りに挑む人々」 その 7

### 弟子屈町川湯地区 猪狩 広 昭

#### 1. はじめに

釧路総合振興局は、主な振興局における秋まき小麦（以下、小麦）の反収（21～27年までの最高、最低を除いた5年平均）で、オホーツク、十勝に次ぐ上位に位置している。

（図 1）。

主産地の網走に比べ、この地区特有の霧が発生し収穫時期が遅れるというマイナス要因がある。しかし、輪作体系や家族労働の配分などから小麦栽培を重要視している弟子屈町川湯地区の猪狩氏（52才）の小麦栽培について紹介する。（写真 1）

#### 2. 地域の特徴および経営概要

##### (1) 弟子屈町の気象および土壌条件

弟子屈町は東北海道の中心に位置し、千島火山帯が町内を横断している。

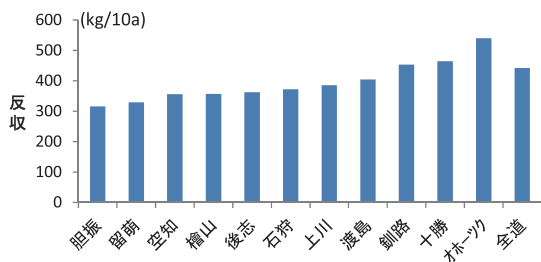


図 1 主な振興局の反収

(H21～27年 7中5)

透明度が高いことで有名な摩周湖の山麓に広がる本町は、千島山脈に属する丘陵地帯で、屈斜路湖を源とする釧路川が町内の中央を縦貫し、地勢は概ね起伏の多い高燥地帯で平坦地は少ない。（写真 2）

地域の約70%は山林地帯で農耕地は屈斜路湖周辺と釧路川、とう別川等、各河川の流域に分散し酪農を農業の基幹とした農山村である。

弟子屈町の気候は、屈斜路湖周辺を除き冷涼で積算気温が1,790℃以下と極めて低く降雪始めは11月下旬であるが積雪量は平均50～100cmで比較的少ないため土壌の凍結度が著しい。さらに初夏は曇雨天が多く、降雨量も7～10月の収穫期に多い。

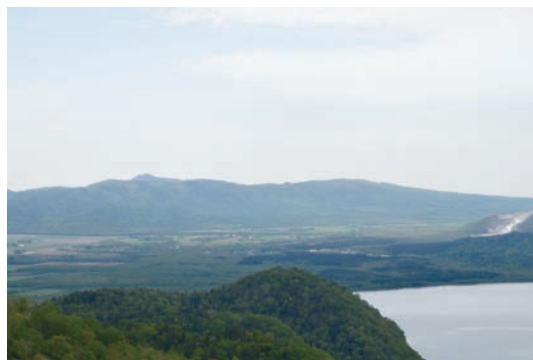


写真 2 川湯地区

(手前が屈斜路湖、右の山が硫黄山)



写真 1 猪狩氏家族

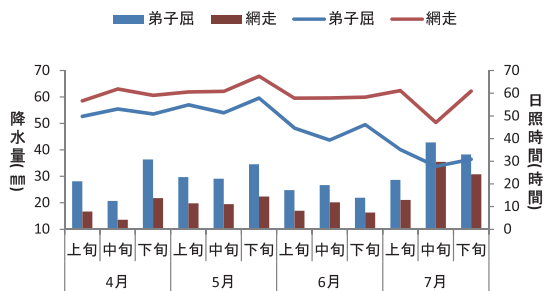


図 2 2地区の降水量と日照時間の比較

(アメダス1981～2010年の平均)

左、棒グラフ～降水量、右、折れ線～日照時間

また、初霜、晩霜は年により変動が著しい。

(図 2、3)

本町の土質は、全般に摩周系火山灰土に覆われ、内陸部において一部沖積土の分布しているところもあるが、大半は植壤土で一般に地味に乏しく酸性土壌で地力の減耗が著しい。

(2) 経営規模と作付け構成

猪狩氏は、131haの大規模畑作経営である。

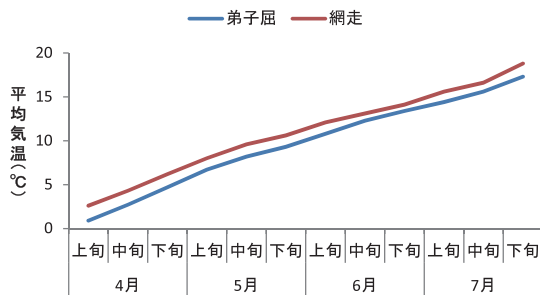


図 3 2 地区の平均気温の比較

(アメダス1981~2010年の平均)

表 1 作付割合 (H27年産)

作物名	品種・用途	作付面積 (ha)	作付割合 (%)
秋まき小麦	きたほなみ	34.06	26
ばれいしょ	でん粉用	27.69	21
	食用	2.47	2
てんさい	種ばれいしょ	4.23	3
	パピリカ	27.07	21
そば	キタワセ	24.12	18
	キタノマシュウ	3.88	3
大豆	ユキホマレ	2.71	2
緑肥	ブラックオーツ	5.22	4
合計		131.45	100

作物は、小麦、ばれいしょ、てんさい、そば、大豆、緑肥を栽培している。各作物の面積と輪作体系は、表 1、図 4 のとおり。

3. 小麦栽培の経過と特徴

(1) 小麦栽培が経営安定に貢献

父の入植当時は、ばれいしょとてんさいの交互作であった。そのため、元々地力が低いことや連作障害もあり作物の出来は悲惨で、移植したてんさいが徐々に消えてなくなる程であった。

その後、小麦が輪作体系の一部になったことや地力対策として堆きゅう肥を施用したこともあり、入植当時に比べててんさいの根腐れ病の発生などが減少し収量は大幅に改善された。

また、昭和63年頃からは、そばが輪作体系に組み入れられ、安定した収量が得られ同時に経営も安定し現在に至っている。(図 5)

(写真 3、4)



写真 3 右側～そば、左側～秋まき小麦

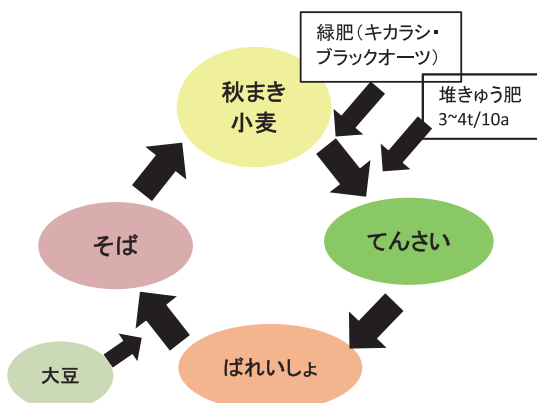


図 4 輪作体系



写真 4 麦畑で共に観察する親子

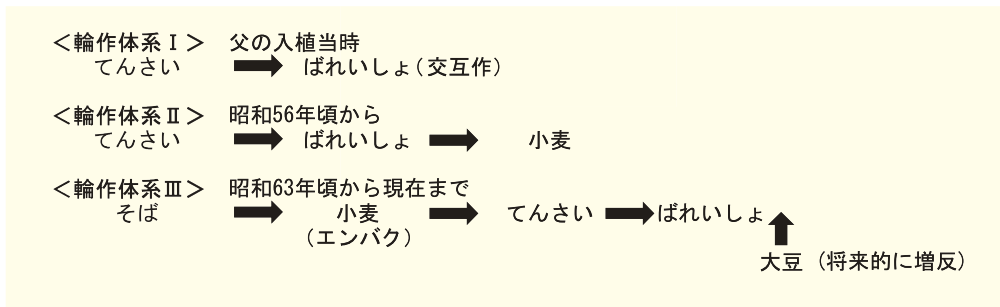


図 5 輪作体系の変遷

この地域の土壌は、前述したように火山灰土が多く、20～30cmと作土が浅く、それ以上深耕すると直径4～5cmもある軽石が出るほどである。

そのため、親の代から地力対策をしっかりしなければ生産力が上がらないのを身にしみ感じてきた。堆きゅう肥の施用だけでなく、小麦や緑肥などによる有機物補給が必須となる。

(2) 収量・品質

当地区は、斜網地帯に比べ小麦の収穫が5日程遅れる地帯である。その分だけ穂発芽発生リスクも高い。特に、「ホクシン」の栽培時には穂発芽が頻繁に発生した。しかし、「きたはなみ」に切り替わってからは、穂発芽の発生はなく安定した生産と経営に結びついている。改めて品種改良の重要性を実感している。

猪狩氏の3年間(平成25～27年産)の平均

反収は、618kg/10aと町平均の1.2倍と高い。また、製品歩留まり率では、約90%である。

(図6) また、平成27年産の小麦品質評価項目では、1等Aランクの格付けである。(表2)

4. 技術の特徴

(1) 不測の事態に備え収穫・乾燥を万全に

収穫遅れによる穂発芽を防ぐために、20年前に個人有の中古コンバインを1台導入した。併せて、自力で乾燥施設も整備した。

現在は、新車のコンバインを7年前に更新し現在に至っている。自家の隣にはJAの乾燥・調製施設があるが、収穫時期の長雨にも対応出来る収穫・乾燥施設を自分で整備している。

施設の容量は、60石の縦型乾燥機を3基、

表 2 品質測定値 (27年産)

容積重(g/l)	F.N.(sec)	蛋白含量(%)	灰分含量(%)
860	399	12.3	1.48

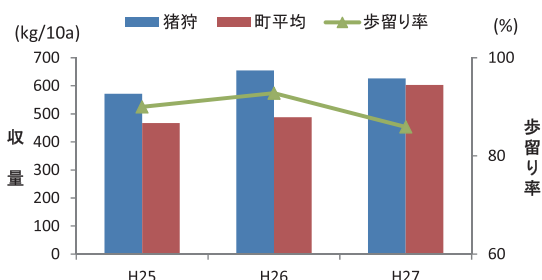


図 6 猪狩氏と町との反収と歩留り率の推移



写真 5 個人有の縦型乾燥機

それに自作の平型乾燥機により相当量の乾燥・保管ができる。緊急を要する時には、ばれいしょ用の大コンテナ（100基）も利用し、とりあえず水分を18%まで下げて倉庫にストックする。この地域で麦作を継続するには、万全の備えが必要と思われた。（写真5）

**(2) 堆きゅう肥と土改剤による土づくり**

堆きゅう肥の利用は、父の代から続け約半世紀にもなる。もちろん、父の時代には酪農家から馬で運んだ。しかし、今はトラックで年間1,500t<sup>ト</sup>を運搬している。遠くは隣町の鶴居村からも運搬し、畑に隣接する堆肥場で2回切り返しをして熟成させている。また、切り返し時には、PH調整と発酵促進のため貝化石を50t混合している。さらには、土壤診断に基づきヨウリンやケイ酸加里（各40kg/10a）も施用している。

父の代から、「とれた分だけはお返しする」という気持ちで堆きゅう肥や土壌改良材を施用。それを怠ると、だんだん麦稈のつやがなくなるように感じている。

**(3) 播種遅れをなくす決め手**

小麦栽培をしているどの地域でも、小麦の前作には頭を悩ます。大抵は、食用やでん粉用ばれいしょの早掘り後に、碎土・整地を急ぎ播種をするのが一般的である。また、春播き小麦を前作とする農家もいるが、春播き小麦の面積は小麦に比べ圧倒的に少ないので難しい。そのため、降雨などの影響により前作物の収穫が遅れ、その分だけ播種期は遅くなる。

その点、前作がそばであれば、小麦の播種までに十分余裕があり適期播種が可能となる。ただ、そばと小麦のコンタミが問題となるので細心の注意が必要だ。しかし、当地区は、コンバインも乾燥調製施設も全く分けているので、これまでコンタミによるトラブルの発生は一度もない。

**(4) 施肥および尿素の葉面散布**

これまでの経験から基肥と起生期施肥は、三要素入りの肥料を使用している。この地帯は、元々地力が低いことや、積雪も少なく凍上害が発生しやすい。そのため、越冬前の茎

**表3 病害虫防除等**（H27年産）

除草剤散布		融雪期	病害虫防除（植物成長調整剤等）			備考
時期	剤名・散布量		対象病害虫防除	時期	使用薬剤・散布量	
5月28日	アクチノール乳剤 MCPソーダ塩	4月18日	眼紋病	5月20日	ユニックス水和剤500倍	
			植物成長調整剤	6月6日	エスレル2000倍	
			赤かび病	6月6日	ベフラン液剤800倍	
			赤かび病 アブラムシ	6月20日	シルバキュアフロアブル2,000倍 エルサン乳剤1000倍	
			赤かび病	7月3日	シルバキュアフロアブル2,000倍	
			赤かび病 赤かび病	7月13日	ベフラン液剤1000倍	
			7月25日	チルト乳剤1000倍		

**表4 耕種概要など**（H27年産）

は種 (kg/10a)			土性	施肥 (kg/10a)					根雪始	雪腐病防除	
期	量	方法		区分	窒素	リン酸	加里	月日		時期	使用薬剤名
9月22日	7	ドリル播き (ユンカリ)	黒ボク土	基肥	8.0	16.0	9.6	9月22日	H26.12.17	H26.11.9	シルバキュアフロアブル +ベフラン液剤25 +トップジンMフロアブル +キノンドー水和剤
				追肥							
				起生期	6.0	6.0	4.8	4月20日			
				幼形期	9.2			5月10日			

数や葉数を十分確保しなければ雪腐病などの被害が多くなりやすいという理由がある。また、凍上などにより起生期追肥が遅くなり、施肥量が少ないと小麦に致命的なダメージを起しやすいためだ。

また、小麦の「顔色」を見ながら、追肥の他にこまめな尿素的葉面散布も3回程行っている。

30ha以上の小麦畑で、10俵以上の高反収を確保するには、多いところでは14～15俵/10aを確保しなければ達成は難しい。そのためには、圃場毎にきめ細かな施肥管理が必要となる。新規に購入した畑は、元々の自己所有畑とは地力に大きな差がある。しかし、地力向上には時間がかかる。そこを補うのが、追肥のやり方や葉面散布のタイミングと考えている。

#### (5) 自走式スプレヤーの導入

容量5,600ℓの自走式スプレヤーを購入して4年目になる。それまでは、1,500ℓの直装式スプレヤーを使用していた。しかし、規模拡大と同時に「飛び地」も増えたことによりこの機械を導入した。散布幅が30m（最大で33m）もあるので効率よく散布が出来る。しかも、各作物の防除のタイミングを外すことなく対応できるようになった。また、GPS機能が搭載されているので、防除畦を間違えることもなく散布ムラもなくなった。

### 5. 今後の課題

現有の機械・施設の装備で、200ha位までの規模拡大が可能と思われる。そのカギを握るのが省力作物の「そば・大豆」の面積拡大である。特に、大豆は将来的には早生の品種も導入して10ha位まで増やしたいと考えている。

また、更なる規模拡大に備え、堆きゅう肥の確保も必要となる。そのため、もう一台の



写真6 花・野菜専用ハウス

トラックを増車できれば、堆きゅう肥の運搬とでんぶん用ばれいしょの運搬などに有効活用できる。

今後は、息子に経営をスムーズに引き継ぐためにも、少しずつ仕事を任せていきたい。

### 6. おわりに

家族全員で写真を撮らせていただいた際、お母さんの趣味である花・野菜専用の固定式ハウスを覗かせていただいた。ゼラニウムなどの花が所狭しと咲いている。また、庭用の鉢花の苗も育てている。(写真6)

冬の管理が大変でしょうとの間に、「薪ストーブや重油で暖をとっている」とのこと。大規模経営では、とてもそこまで手が回らないと思いきや、結構家族で旅行したり、趣味や農家生活を楽しんでいるように感じた。

#### <猪狩氏のコメント>

土づくりは、「畑に貯金する」ようなものだ。銀行に預けるより確実に利息がついて戻ってくる。

小麦が取れ出すと、経営が良くなるのが解る。そして、その分だけ経営に対し意欲がわいてくる。各地で1トりの実績も聞こえてくるので、高見を目指して頑張っていきたい。

(文責 北海道米麦改良協会 高橋義雄)